

出水方言のモーラ声調単位とイントネーション

Moraic TBU's and Intonation in Izumi(Kagoshima) Dialect

児玉望

Kodama Nozomi

はじめに

児玉(2008)において筆者は、鹿児島県北部出水方言の二型アクセントを、木之下(1953)の左右傍線による表記を音声表記としてではなく音韻表記と解釈することにより、鹿児島方言と同様のアクセント句末音節の曲線声調(下降/非下降)によって弁別される体系として分析できることを示した。本稿では、さらに、木之下(1954)の句末イントネーションの記述を同様に再解釈し、鹿児島方言のそれと比較することにより、アクセント句、音韻句、イントネーション句から成る韻律構造階層がそれぞれどんな曲線音調を標識とする構造であるかを考察する。

児玉(2008)では、曲線声調として分析することにより、先行研究で音節内部の2「モーラ」間で段階声調HからLあるいはLからHへの変化の契機(「アクセント核」)があると分析されてきた出水方言の長音節も、単一の曲線声調をもつ音節として短音節と同様に取り扱うことができるという見通しであった。しかし、児玉(2008)で鹿児島方言で異なる実現形をもつ2種類の長音節を区別するために「(音節未満の)曲線声調の担い手」として新たに定義したモーラ声調単位の分析を出水方言のアクセント句にも適用しても、出水方言のA型アクセント句末の長音節はやはり2モーラから成ると分析され、この点が2モーラ長音節(重音節)が例外的な鹿児島方言との違いの一つであるとみられる。このことを、句音調(音韻句標識)や句末イントネーション(イントネーション句標識)の曲線音調が音節に加わった(「2モーラ化」した)場合との弁別が失われるかどうかという観点から論じていく。また、この「2モーラ化」を、終助詞の担う句末イントネーションの分析で考慮して木之下(1954)の記述を再検討すると、児玉(2008)での鹿児島方言の終助詞アクセント句と句末イントネーションを終助詞のない場合と区別した分析にも見直しが必要になる。これらを総合して、鹿児島方言と出水方言の韻律構造についての修正案を提示する。

なお、本稿と児玉(2008)では上述の通り「モーラ的声調単位 moraic tone bearing unit」という超分節的・韻律論的な意味でモーラという語を用いている。日本語学においてモーラはしばしば、音節ではない(音節の部分である)が音節と似た機能・性質をもつ音韻論上

の単位、という意味で用いられるが、ここでは通常は音節につき1つ実現する曲線声調が2つ加わるということのみを問題にしているのであり、他の方言で定義された「モーラ」やその性質には関知しない。定義上モーラはアクセントの担い手であるが、そのことはこれらの方言に「(特殊)拍」や「モーラ音素」として機能する分節音が存在する、とか、それらがアクセントを担う、と主張するものではない。この点についてはあらためて触れる。

1. 「出水方言における呼びかけのイントネーションについて」

木之下(1954)は、出水方言の文末の音調を「末尾を下げようとする降調と下げまいとする昇調・平調」に二分し、これらがアクセント型の区別をもつ語に加わって型の区別が失われる場合・失われない場合、および、アクセントが「固定していない」終助詞に加わって「表現の態度」を区別する場合について詳述した論文である。これらの降調・昇調・平調は、曲線声調としてではなく高低・低高・高高の段階の連続が「2音節」に加わったものとして冒頭で定義されているが、1音節の語や終助詞についてはこの全体の音調を指しており、ここでいう「音節」の定義は必ずしも厳密ではない。また、上下の傍線によるイントネーションの表記も、たとえば同じ降調を、次末拍の上傍線のみで示す場合、末拍（あるいは降調助詞）の下傍線のみで示す場合とがあって、これらの表記の違いが意味するものが明らかではないが、降調／昇（平）調の区別の例示として提示されているため、これらのどちらを表記しているかにはほとんどの場合に誤解の余地がない。一方、同じく傍線によるアクセント型の区別は、イントネーションによって区別が失われている場合を除いてA型で次末拍高、B型で末拍高を上傍線で表記する形が主であるが、木之下(1953)に用いられたA型末拍の低を下傍線で示す表記も一部に混在している。つまり、アクセントの音調表記とイントネーションの音調表記の区別はほとんどない。

このような表記自体も、アクセントによる音調と（句末）イントネーションによる音調が、「型の区別」という点を除いた純粋に音韻論上の観点からは質的に差がないのではないか、つまり、句末イントネーションが曲線声調なのであれば、アクセントの弁別もやはり曲線声調によるのではないか、ということを想像させる。しかし、より決定的だと思われるのは、型の区別があるアクセント句の句末に終助詞を介さずに直接句末イントネーションが現れる場合、アクセント型の区別が失われうる、という点である。句末イントネーションが曲線声調、アクセント型の弁別が最終音節の段階声調であるとするれば、両者の組み合わせによってイントネーションが決定されたときにもアクセント型の区別は維持されるはずである。実際、句音調によってA型次末音節、B型末音節が高平調音節として現れる

鹿児島方言では、下降調の句末イントネーションが加わっても型の弁別には影響がない。

(1) [ア]メ=F% 「飴？」 ア[メ=F% 「雨？」

これに対して、音調句の標識としてこのような音節の卓立を用いない出水方言では、児玉(2008)で提示したように型の弁別がもっぱら最終音節の曲線音調(A型で下降調、B型で非下降調)によるのだとすれば、句末音節を一律に下降調とするだけのイントネーションが被さったときには鹿児島方言で観察される低い下降調と高い下降調の区別がなくなることが予想される。このような観点から、曲線音調によるアクセント解釈の裏付けともなりそうな、アクセント句の区別の喪失(の有無)について、木之下(1954)の詳細な記述を検討してみる必要がある。

一方、1のような鹿児島方言との比較は、鹿児島方言側の解釈にも問題を投げかける。鹿児島方言で維持される弁別が、句音調によって作り出される卓立高平音節の位置によるものであるとすれば、このような音節の現れない場合には鹿児島方言でもアクセント型の弁別が失われる、ということになるだろう。この場合に該当するのは、句音調の加わらない音調句の2番目以降のアクセント句と、句音調による上昇が音節全体ではなく冒頭のみに加わる場合(重末音節をもつアクセント句と単音節アクセント句)である。

(2) [マ]タ[ア]メ=F% 「また飴？」 [マ]タ[ア]メ=F% 「また雨？」

実際には、少なくとも句音調の加わらない場合には、段階声調ではなく末音節の曲線声調によって、型の弁別が維持される。A型では、]メで表示した末音節の全体が下降調をとるのに対し、B型では末音節全体が長められて、前半部の(低)平調に引き続いて下降声調が続く形となる。二つの声調が音節内に共起するためのこの音節の延長は、音韻論上弁別される母音の長さの変更を伴った長母音化とは区別されるべきであり、児玉(2008)の、曲線声調の担い手としての「モーラ」という語を用いて、「2モーラ化」と呼ぶことにする。このような2モーラ化は、1の、句音調が加わっている場合のB型でも平行して観察される。本来下降調であるA型の末音節では、下降調イントネーションが加わっても全体が下降調のままであり、2モーラ化による延伸は、起きないか、あるいは起きてても任意である。この観察は逆に、句末イントネーションの中に句末音節の2モーラ化を引き起こすものと音節全体の曲線声調を変更するものがある可能性を示唆する。木之下(1954)のアクセン

ト句の区別が失われるか、維持されるかには、このような句末イントネーション自体の区別が関与している可能性を考慮しなければならない。

「モーラ」を音韻論上の音節の構成成分としてのみではなく、より具体的な曲線声調の実現の単位にも拡大して適用するということになると、句末イントネーションだけではなく、句音調が音節内に現れる場合も2モーラ化の例ということになる。鹿児島方言で、音韻句を構成して単独で発話されたときのA型単音節アクセント句がB型のそれと比べて長いことは、平山(1936)以来繰り返して記述されているが、これは、句音調が加わって音節内に二つの異なる曲線声調が共存するためであるから、やはり2モーラ化となる。これに下降調のイントネーションが加わると、B型も2モーラ化して型の弁別が困難となる。A型の句音調は、下降調句末イントネーションと共に起るときにはプロミネンスが加わったときと同様な鋭い上昇調が現れやすく、このような場合には2モーラの長さの配分がA型とB型の弁別に関与するとも分析できそうであるが、両者が何らかの離散的な対立関係にあるとは見なし難い。一方、句音調が加わらない位置では句末イントネーションによって2モーラ化するのはB型の場合だけであり、A型下降音節は任意に長められることはあっても全体としての下降調（およびB型より低いという聴覚印象）は一貫しており、弁別は維持される。

- (3) a. [エ (LvF) 「柄」 [エ] ([Lv) 「絵」
 b. [エ=F% (RF) 「柄？」 [エ=F% (RF) 「絵？」
 c. ナン[ノ]]エ=F% (F) 「何の柄？」
 d. ナン[ノ]]エ=F% (LvF) 「何の絵？」

鹿児島方言では、長母音を含む長閉音節と、語彙的に指定された一部の（歴史的に子音の脱落に由来する）長開音節が本来の（音韻論上）の2モーラ音節であり、A型アクセント句の音調配列として句末に\$(nF)F\$を指定しておかなければならない。B型アクセント句末ではRまたはLvというnFの連続であり、音節を分割しない限り声調の境界が判然とせず、1モーラで発音されているとみなしうる。これらの音節では句音調による段階音調[Hが型に関わらず末音節冒頭となるため、B型アクセント句に下降調句末イントネーションが加わって2モーラ化すると、句音調が加わる場合にこの位置によって型を弁別することができない。句音調が加わらない場合にも、A型・B型ともに末音節が2モーラとなるため、弁別が困難となる。

(4) a.	カード[ローン	(LvF)	「カードローン」
	ガクセー[ローン]	(RLv)	「学生ローン」
b.	カード[ローン=F%	(RF)	「カードローン？」
	ガクセー[ローン=F%	(RF)	「学生ローン？」 ¹⁾
c.	[マ]タ カードローン=F%	(LvF)	「またカードローン？」
	[マ]タ ガクセーローン=F%	(LvF)	「また学生ローン？」

以上、まとめると、下降調イントネーションによって末音節の曲線音調によるアクセント型弁別が失われるとしたら、次の場合があると考えられる。いずれも、分節音構成が同じでかつ句音調の位置による対立がないことを条件としている。

I B型非下降調音節の2モーラ化が起きず、末音節全体が下降調 (F)

II B型非下降調音節の2モーラ化が起きかつA型下降調音節が本来2モーラ (nFF)

このような観点から、木之下(1954)に記述されている、アクセントの型の弁別を失わせるような下降調イントネーションの例を分析していく。

2. アクセント句に被さる句末イントネーション

木之下(1954)に挙げられる句末イントネーションは、アクセント句に直接被さるものと終助詞上に実現するものとに大別できる。後者が先行アクセント句のアクセント型に影響しないのに対し、前者はいずれもアクセント句の句末音節を下降調にし、中には型の弁別を失わせるものもある。ここでは、アクセント句に被さる下降調を、この下降調が実現する音節の種類によって分類して分析する。

i) 本来の短音節：呼びかけ

ii) 延ばした短音節：呼びかけ、命令

iii) 本来の長音節：呼びかけ、助動詞命令

iv) 延ばした長音節：呼びかけ

v) 助詞と融合した長音節：ai<*ワ+ヨ oi<*ウ+ヨ saa<*ス+ワ、用言+Q<*ト

筆者より下の世代の鹿児島方言では、疑問文に終助詞を欠いて下降調イントネーションのみを用いる言い方が多用されるが、木之下(1954)では用言に（自立性の低い）準体助詞が接続しているものを除いて例示がない点が目を引く。

2. 1. 短音節に終わる呼びかけと命令

A 型、B 型の区別なく次末音節に「高」が付される下降調である。「高」音節が長音節の場合には、母音に上傍線が付されている。つまり、末音節は A 型でも B 型でも全体が低い下降調であろうと解釈される。以下、木之下からの引用例は、上傍線部を太字、下傍線部を斜字で示す。"↑" (音節間上昇・句頭上昇) と "↓" (音節間下降・句末下降) による表記は、児玉の解釈による。「高音部を卓立させる程、力をこめた呼びかけ」と説明されており、句末イントネーションだけでなく句音調のプロミネンスと組み合わせるイントネーションであるとみられる。呼びかけは通常は 1 アクセント句での発話であり、必ず単独で音韻句を成していると考えられる。

- (5) [マツ]ダ=F% 1) 「町田！」(A 型) cf. [マツ]ダ
2) 「松田！」(B 型) cf. [マツダ] (木之下 1954:92)

鹿児島方言では、呼びかけの場合にも、A 型で次末音節、B 型で末音節に句音調による [H が付与され、B 型末音節は下降調句末イントネーションが加わって 2 モーラ化する。これに対して、出水方言の呼びかけの下降調は短音節を 2 モーラ化せず、B 型末音節全体が下降調をとると考えられる。鹿児島方言の 2 モーラ化は、B 型末音節がやや長くなるものの、短母音が長母音化するわけではない。出水方言では (長母音化しない) 短母音は句末イントネーションが加わっても 2 モーラ化しない、と一般化できる可能性がある。

句末音節の短母音が長母音化すると、出水方言でも下降調イントネーションによる 2 モーラ化が起きる。つまり、「最後の母音の終わりの部分が下降し」最初の部分に非下降の声調が現れる。しかし、同様の 2 モーラ化は A 型アクセント句でも起きるため、型の弁別はやはり維持されない。

- (6) a. オカ[ノオー=F% 「岡野！」(A 型) cf. オカ]ノ
b. マサ[ジイー=F% 「まさ小父！」(B 型) マサジ] (木之下 1954:92)

鹿児島方言の呼びかけの下降調句末イントネーションでは、短母音が長母音化しても A 型アクセント句の下降調末音節は 2 モーラ化しない。句音調による卓立音節は次末のままである。

動詞の命令形も下降調イントネーションを伴うことがある。この場合、B 型では末母音

が長母音化して 2 モーラ化する。木之下(1954)では、このイントネーションが伴わない場合の末母音が短い B 型命令形を「事務的な無愛想な口ぶり」と表現している。ただし、興味深いのは、これに対応するような A 型でのイントネーションの有無に関する言及がほとんどないことである。本来末音節が下降調である A 型命令形では、イントネーションの有無のみによる区別が発音上微妙なものになろう。A 型末音節を「ごく稀に」長く言う場合には、2 モーラ化が任意であるとする。2 モーラ化する場合の「押しつけるような命令」のニュアンスをもつ場合が下降調イントネーションの加わった場合と考えられる。ただし、1 音節 A 型のセエ「しろ」は、2 モーラ化長母音の形式だけが記載されており、B 型のケ、ケエ「来い」が、非下降・短、非下降・長、下降・長の 3 種の実現形で言及されているのと著しい対照を成している。

- (7) a. [イ]ケ～ [イ]ケエ～(稀)イ[ケエ=F% 「行け」
 b. イ[ケ]～イ[ケエ=F% 「埋めろ」
- (8) a. [セエ 「しろ」 cf. [セ]エ ネエ=RF%
 b. [ケ]～[ケエ] ネエ=RF%～[ケエ=F% 「来い」 (木之下 1954:93)

以上から予想されるのは、出水方言では音節が長いことが 2 モーラ化するための必要条件である、ということである。呼びかけの場合は末母音の延長はアクセントとは無関係であるが、命令形への下降調イントネーション付与では B 型の 2 モーラ化を実現するために母音が延ばされている、と考えられる。このような、B 型のみ短母音の延長の例として、筆者のデータを追加する。

- (9) a. [ダイ]モ [オラン]ト 「誰もいないんだ」(A 型)
 b. [ダイ]モ [コン]ト 「誰も来ないんだ」(B 型)
- (10) a. [ダイ]モ [オラン]ト=F% 「誰もいないの？」
 b. [ダイ]モ [コン]ト=F% 「誰も来ないの？」
- (11) a. *[ダイ]モ [オラン]ト=F%
 b. [ダイ]モ [コン]ト=F% (RF) 「誰も来ないの？」

出水方言では、準体助詞トがアクセント句として独立せず限定部と統合してアクセント句を構成する。²⁾ 準体助詞文の疑問形では準体助詞が促音化されずトで出現する場合に下

降調句末イントネーションがこのトに加わるが、トが短いときはA型でもB型でもト全体が下降調となる。ただし、B型ではトが長母音化して2モーラ化されうる。なお、11bの[コン]ト=F%は、トがアクセント句として独立する鹿児島方言の形、[コン]ト=F%(vs. [オ]ラン)ト)とほぼ同形である。この形式が出水方言本来のものかどうかはもう少し検討が必要かもしれない。

以上、短音節に被さる下降調イントネーションは、呼びかけの場合と命令形の場合で異なるふるまいをする。前者は、B型アクセント句の非下降末音節を2モーラ化せず、音節全体を下降調にする。後者は、B型アクセント句の非下降末音節が長音節化したものを2モーラ化する。前者は型の弁別を失わせるが、後者はA型末音節が長音節化しない限り型の弁別を保つ。

2. 2. 本来の長音節に終わる呼びかけと命令

本来の長音節に終わる呼びかけとしては、接辞のクン「君」、サン「様」、ドン「殿」など、有声閉音節に終わる例が挙げられており、A型・B型の区別がないとされる。

- (12) マツダ[ドン=F% 1) 「町田さん！」(A型)
 2) 「松田さん！」(B型) (木之下 1954:92 改)

表記は、ドに右傍線であり、木之下(1953)のンにA型で左、B型で右傍線という句末イントネーション無標の場合とは異なる。B型は、末母音の長母音化を伴う場合と同様に2モーラ化であると見なすことができる。A型では二通りの解釈が可能である。

(a) 本来の2モーラ(nFF)が呼びかけイントネーションに伴う句音調プロミネンス付与のためRF化

(b) 1モーラ(F)である末音節が呼びかけイントネーション付加によって2モーラ化してRF

aは鹿児島方言の2モーラ末音節4a-bと並行的とみる解釈である。Bの現象は、鹿児島方言では13cのようにA型の1モーラ長音節が延長されて呼びかけイントネーションが付加されたときに観察される。

- (13) a. マチ[ダ]サン 「町田さん」
 b. マチ[ダ]サン=F% 「町田さん！」
 c. マチダ[サーン=F%(RF) 「町田さーん！」³⁾

出水方言では、鹿児島方言のような卓立高平音節が現れないため、どちらの解釈をとるべきかがこの例だけでは決定できない。出水方言でも、呼びかけに伴って末音節が長められる例が木之下(1954)に挙げられている。この場合にも型の区別はない。興味深いのは、無声子音に終わる閉音節の呼びかけも、(これらの無声部のみが傍線を付されない表記で)下降調表記されている点である。⁴⁾

- (14) a. ヨシ[ユーツ=F% 「良行！」(B型)
 b. マツダ[サーン=F% 「町田さん！」(A型)、「松田さん！」(B型)
 c. オ[ヨーシ=F% 「およし！」(A型) (木之下 1954:92)

無声子音に終わる呼びかけは、母音の延長されていない例が挙がっていない。母音内部だけで2モーラの曲線声調が実現されるために母音が延ばされるのが普通であることを反映するのかもしれない。いずれにしても、これらの例は、曲線音調の担い手としての「モーラ」が、音節構成成分の長さの単位(あるいは、構成成分の数)とは独立したものであることを物語っていると言える。この3単位○○○から成る長音節が、○|○○と分割されるか○○|○と分割されるかによる区別や、最後が無声になることによる対立の中和は一切報告されていない。2単位長音節の場合と同じく、音節全体として2モーラであると考えなければならない。

命令文の下降調イントネーションは、動詞の命令形だけではなく、単独ではアクセント句を構成しない助動詞を付加された動詞形にも現れるため、この句末イントネーションが多音節語の長い末音節に加わる例もある。木之下(1954)で取り上げられるのは、動詞連用形にアルが接続した形に由来すると分析される敬語形～ヤン、～ヤイの形である。～ヤイがこの助動詞の命令形、～ヤンはさらに丁寧の助動詞(ンス)が付加された形の命令形～ヤンセの短縮形である。敬意度の高い～ヤンセには「押しつけがましい口ぶり」(木之下 1954:94)になる下降調イントネーションが現れにくい、より親しみを込めた～ヤン、～ヤイでは下降調句末イントネーションを伴うことが普通であるとみられる。鹿児島方言の対応形では、おそらく「～したらどうだ？」というような提案して相手の同意を促すニュアンスを下降調句末イントネーションによって表現している。

下降調イントネーションが加わらない場合には末音節でA型下降調、B型非下降調の区別がある。また、下降調イントネーションを担うの終助詞カが接続する場合にも型の弁別は保たれる。これに対し、句末イントネーションが被さって型の区別がなくなる場合につ

いて木之下(1954)は表記の異なる二つの段階を区別している。

- (15) a. [クイヤ \underline{n} =F%、[クイヤ \underline{i} =F% 「下さい」 cf. クイヤ \underline{n} -カ=F%
 b. [ミヤ \underline{n} =F%、[ミヤ \underline{i} =F% 「見なさい」 cf. ミヤ \underline{n} -カ=F%
- (16) a. クイ[ヤ \underline{n} =F% 「下さい」
 b. ミ[ヤ \underline{i} =F% 「見なさい」 (木之下 1954:93)

15a-b では、木之下(1953)のアクセント A 型表記同様、最後の \underline{n} 、 \underline{i} に下傍線のみが付されているのに対し、16a-b は、「押しつける気持ちに更に強ければヤを上げる。」として次末音節に上傍線が加えられている。後者は、呼びかけイントネーションで用いられているプロミネンス付与された句音調との組み合わせであると見られる。15a-b はこのようなプロミネンス付与がなく、句末イントネーションのみが付されていると考える。鹿児島方言でもこの 2 段階の区別があり、16 に対応する形ではヤンが延ばされて 2 モーラ化するのが普通である。しかし、A 型では句末イントネーションのみの語形とイントネーション無標の語形の区別がない。

- (17) a. [クイ]ヤ \underline{n} =F%、[クイ]ヤ \underline{i} =F% 「下さい」
 b. ミ[ヤ \underline{n} =F%、ミ[ヤ \underline{i} =F% 「見なさい」 cf. ミ[ヤ \underline{n}]、ミ[ヤ \underline{i}]
- (18) a. クイ[[ヤ \underline{n} =F%(RF) 「下さいよ」
 b. ミ[[ヤ \underline{n} =F%(RF) 「見なさいよ」

出水方言においても A 型無標形と句末イントネーションのみの付加形が区別されないとすれば、この A 型無標形の長い末音節は、2 モーラ化している B 型句末イントネーション付加形と同形である以上、本来 2 モーラである、ということになろう。句音調が付加されない位置においても A 型末音節での下降は鹿児島方言より明らかに遅く開始され、B 型句末イントネーション付加形と同形になっている。

- (19) a. [コイ(RF)]クイヤ \underline{n} (RF) 「これ下さい」
 b. [コイ(RF)]ミヤ \underline{n} 「これ見なさい」
 c. [コイ(RF)]ミヤ \underline{n} =F% (RF) 「これ見なさいよ」

出水方言では、長音節が A 型では本来 2 モーラであるのに対し、B 型では、呼びかけのイントネーションと命令のイントネーションが共に長音節を 2 モーラ化する。このために、句音調の有無に関わらず句末イントネーションが被さると型の弁別が失われるのだと見られる。長音節がさらに伸ばされた場合でも弁別は回復せず、本論文でいうモーラの数 は 2 のままである。

2. 3. 単独で音節を構成しない助詞の付加による長音節への句末イントネーション

木之下(1954)によれば、疑問文の各種句末イントネーションは基本的には終助詞に担われており、先行する用言のアクセント型の弁別に影響しないが、「疑問助詞省略」の結果として句末イントネーションがアクセント型の弁別を失わせる例として、準体助詞の促音化形に終わる疑問文の例が挙げられている。

(20) a. ドイ⁵ガ]]ヨカツ=F% 「どれがいいの？」 cf. ヨカツ]](B 型)

b. ナイガ]]オモシトカツ=F% 「何が面白いの？」 オモシトカツ (A 型)

木之下(1954: 96)

上述のように、出水方言では準体助詞が単独でアクセント句を構成せず、先行用言と一体化する。句末イントネーションが加わらなければ、促音化して音節が再編された場合でも、この末閉音節が A 型下降、B 型非下降の曲線声調による弁別を保つ。しかし、17 では、「ツはすべて降調」として弁別がないことが述べられている。この降調は、句末イントネーションによるものであるが、音節末子音が無声でピッチを持たないにも関わらず（イントネーション無標形で A 型にのみ現れる）下降調であると断定している点が興味深い。つまり、短母音が延ばされないで 2 モーラ分のピッチ変動を担っているこの論文の唯一の例となっているわけである。この長音節全体で、A 型アクセント句末では本来の 2 モーラ、B 型アクセント句末では句末イントネーション追加のために 2 モーラ化した形と分析される。なお、疑問イントネーションが短開音節に加わる場合は B 型が 2 モーラ化するのみで型の区別は保たれる。句音調の加わらない位置では、出水方言でも鹿児島方言と同様に、短母音が短母音のままで 2 モーラ化すると考えられる。

(21) a. ドイガ]]ヨカ=F% (LvF) 「どれがいい？」

b. ナイガ]]オモシト]カ=F% 「何が面白い？」

単独で音節を構成できない終助詞が接続して末音節が再編される場合も、句末長音節に本来助詞の担うべき句末イントネーションが加わる形となり、型の弁別が失われる。準体助詞の場合と異なり、これらの形式には句末イントネーション無標の形式が対応しないので「本来」の2モーラ音節や2モーラ「化」が定義できないが、末音節がいずれの型でも2モーラであるという点でこれらの形と共通である。

- | | | | |
|---------|----------|---------|-----------------------------|
| (22) a. | イ[カイ=F% | 「行くわい」 | [イク] (A型) |
| b. | チャ[ライ=F% | 「そうだよ」 | [チャツ] (B型) |
| c. | ヨ[カイ=F% | 「いいや」 | [ヨカ] (B型) |
| d. | シラ[ナイ=F% | 「知らないよ」 | [シラン(RF)] (A型) (傍線なし) |
| 23) a. | ノ[モイ=F% | 「飲もうよ」 | [ノモ] (B型) |
| b. | イ[コイ=F% | 「行こうよ」 | [イコ] (A型) |
| c. | ミ[ロイ=F% | 「見ようよ」 | [ミロ] (B型) |
| d. | [シュイ=F% | 「しようよ」 | [シュ(I)ウ] (A型) 木之下(1954: 96) |

22 は用言終止形に助詞ワが融合したと見られる形式にイが接続する場合、23 は動詞勧誘形にイが接続する場合である。それぞれ丁寧形(ン)スに接続する場合(ンサア、ンソイ)も併記されている。ンサアのアはイの異形態と分析されている。19 に対応する形式は、鹿児島方言では、終止形+ワに由来する2モーラの重音節形 Caa に助詞ヨまたはイが接続する場合である。ヨが接続する場合は句末イントネーションをヨが担うため型の弁別があるが、イが接続する場合は Caa 全体が2モーラ(RF)となり型の弁別をなくすか、あるいは軽音節の Cai に縮約されて型の弁別を維持する。前者では通常、後者では任意に、終助詞サ=F%がさらに接続して~イサの形を取り、聞き手に向かって「~じゃないか」と主張するときに用いられる。この場合、終助詞の連続となるが、すでにイと融合している動詞形は型の弁別を失ってれば回復しない。20 に対応する形式では、Coi は軽音節となり、句末イントネーション付加により B 型にのみが2モーラ化して、型の弁別が維持される。

- | | | |
|---------|------------------|---------|
| (24) a. | イ[カー(RF)=ヨ(F%) | 「行くわい」 |
| b. | ジャ[ラー]=ヨ(F%) | 「そうだよ」 |
| c. | ヨ[カー]=ヨ(F%) | 「いいや」 |
| d. | シラン[ナー(RF)=ヨ(F%) | 「知らないよ」 |

- (25) a. イ[カーイ=F%(RF) ~[イ]カイ=F% 「行くわい」
 b. ジャ[ラーイ=F%(RF) ~ジャ[ライ=F% 「そうだよ」
 c. ヨ[カーイ=F%(RF) ~ヨ[カイ=F% 「いいや」
 d. シラン[ナーイ=F%(RF) ~シ[ラン]ナイ=F% 「知らないよ」
- (26) a. ノ[モイ=F% 「飲もうよ」
 b. [イ]コイ=F% 「行こうよ」
 c. ミ[ロイ=F% 「見ようよ」
 d. [スイ=F% 「しようよ」

筆者の世代の鹿児島方言にはほかに、単独で音節を構成できず接続した語形の音節を再編して長い末音節を構成して下降調句末イントネーションを加える形態素として、動詞テ形に接続するン「~してみろ」があるが、この場合も2モーラ化が起きるのはB型のみであり、A型は次末卓立音節に接続して全体が下降調であって型の弁別が維持される。出水方言において、この種の形態素がすべて型の弁別を失わせるのは、出水方言でA型の長い末音節が必ず2モーラであることを示していると考えられる。

以上、下降調句末イントネーションが被さる場合に型の弁別が失われるのは、以下の二つの場合に限られることが確かめられた。

I B型非下降調音節の2モーラ化が起きず、末音節全体が下降調 (F)

II B型非下降調音節の2モーラ化が起きかつA型下降調音節が本来2モーラ (nFF)

鹿児島方言との違いは、まず、出水方言では句音調の加わる位置での句末イントネーションによる2モーラ化が長音節に限られる、ということである。このために呼びかけのイントネーションでは短音節をもつB型アクセント句にIが適用されて型の弁別が失われる。また、鹿児島方言では長音節は2モーラである場合が例外的であるのに対し、出水方言ではすべて2モーラであり、IIが適用されるケースとなる。この二つの違いのために、出水方言では鹿児島方言よりも句末イントネーションによる型の区別の中和が起きやすいと考えられる。

なお、冒頭で述べた、鹿児島方言と出水方言の句音調の違いは、主にIの適用と関わっている。鹿児島方言では短音節が2モーラ化することにより、句音調による上昇調と下降調句末イントネーションがB型アクセント句末音節に共存することができるが、このことは、B型アクセント句の句音調が実現できるのが末音節（あるいはその最初のモーラ）に

限る「位置弁別型」であるため、というようにも解釈できる。呼びかけイントネーションがしばしばプロミネンス付与された句音調を伴うのは出水方言でも鹿児島方言でも同じであるが、鹿児島方言で句音調が実現できる位置が末音節冒頭に限るのに対し、出水方言の句音調は、先行する音節があれば必ずしも短末音節に加わらなくてよい、と判断される。逆に、長音節では、A型・B型に関わらず末音節（あるいはその最初のモーラ）まで句音調による高いピッチが実現する。

4. 終助詞の句末イントネーションと「2モーラ化」

児玉(2008)では鹿児島方言の終助詞が RF%, R%, FR%, F% の4種の曲線声調のいずれかという離散的な体系をもつ句末イントネーションを担い、終助詞が接続する場合にはアクセント句の曲線声調は句末イントネーションについて無標の形で現れ弁別を保つ、とした。木之下(1954)ではすでに、出水方言の終助詞についてはほぼ同様の分析が行なわれている。たとえば、鹿児島方言の終助詞ガに対応すると思われるガについては、ガ上傍線(R%)、下傍線(F%?)、ガアのガのみ上傍線(RF%)、アのみ上傍線(FR%?)の4種の表記でそれぞれ異なるニュアンスが記述される。表記は必ずしも固定していないが、「降調」(RF%, F%)についてはほぼ一貫しているとみられる。これらに対比される非下降の「昇調」は、2モーラ化した表記で共に上傍線など異なる表記のものもあるが、仮にFR%かR%のいずれかに当てはめて分類すると以下の一覧のようになる。意味は児玉がまとめたもので参照のために付した。[]内は言及のないものである。アスタリスクを付したものと冒頭の”J”に関しては後述する。

(27) 出水方言の終助詞

ガ	RF%	R%	FR%*	F%	勧誘・推定判断。同意強要。
ナ	RF%	R%	F%*		同意要求、中止。+敬意。
ネ	RF%	(R%)	F%*		同意要求、中止。『昇調は多くない』
ケー	RF%	[R%]	F%*		質問。
ヲ	RF%	R%	F%*		念押し、中止。+敬意。
ヨ	RF%	R%	F%*		念押し、中止。
ハン	(R%)	F%*			中止。R%は文末。2人称代名詞と同音
ワイ	(R%)	F%*			中止。R%は文末。2人称代名詞と同音
]ド	FR%	F%			念押し、独白。

]カ	FR%	F%	(動詞+ン) 命令・詰問
]ヤ	FR%	F%	質問。－敬意。
カイ	R%	F%*	質問。－敬意。
]ナ	FR%	F%	質問。＋敬意。
]コ	FR%	F%	質問。＋敬意。 ⁶⁾
]ヨ	-	F%	質問(疑問詞疑問文?)。－敬意。 ⁶⁾
ヤン	FR%*	F%*	動詞テ形接続。「(～てみる)」＋敬意。
ノ	FR%*	F%(*)	動詞テ形接続。「(～てみる)」

助詞の違いは、地域差だけではなく、世代差も反映しているとみられる。たとえば、児玉(2008)ではガのほかに4種の声調すべてをとるものとしてネとケを例示したが、出水のデータでは、「同意要求/中止」と児玉がまとめたナ、ネと質問のナ、あるいは、カ、ケー、カイというように複数の助詞によって区別されている。敬意有標の目上・年長者に対する終助詞は、筆者の世代ではナのみが残存している。ハンは、鹿児島県北西部で聞かれるやや丁寧な二人称代名詞(B型)に対応する間投助詞的な形式であるが鹿児島方言ではワイ(B型)のみが用いられる。

このような違いを除けば、児玉(2008)の分析と木之下(1954)の分析はよく似ている。具体的にいうと、終助詞に固有のアクセントを認めず、いくつかの可能な句末イントネーションのみを実現する単位になっている、とする点で同種の分析であるといえる。これに対置されるのは、木部(1997)の疑問終助詞の分析において採用されているような、終助詞の音調を助詞のアクセント型(高または低)とそれに被さる曲線声調とに分析する、という考え方である。

前節までで述べた鹿児島方言と出水方言の違いにも関わらず、終助詞の分析がほぼ同じになっている、という点についてはより詳細な検討を要するように思われる。出水方言の終助詞には長音節に終わるものもあるが、これが単一の下降調(F%)を担うとすれば、他のアクセント句とは異なる終助詞イントネーション独自の特徴ということになる。この背後にはさらに、RF%やFR%のような曲調は、単一の曲線声調とみなすべきなのか、2モーラの組み合わせとは解釈できないのか、というより根源的な問題がある。出水方言の場合、終助詞が付加されない場合に存在が確認される句末イントネーションは下降調のF%のみであるが、これが終助詞に付加された場合に2モーラ化を引き起こしているケースがないのか、という点は少なくとも確認しておく必要があるだろう。

実は、鹿児島方言の 3c-d に見られるような、句音調を伴わない低い位置での 2 モーラ化した下降と 1 モーラの下降の対立と分析できそうなケースが、出水方言の終助詞にも観察される。

- (28) a. ジャット]]ナ(LvF%) 「そうなんだよな」(相槌)
b. ジャット]]ナ(F%) 「そうなのか?」(質問)

しかし、木之下(1954)では、この二つの助詞ナは共に降調として表記上区別されず、質問のナ(F%, FR%)のみの別項はあるものの(p96)、助詞としても同一として扱われている。

- (29) a. [オハンガ] ソゲン [ユ]タ_ナ ナ(LvF%)
『あなたがそんなに言ったよー確かに覚えています』
b. [ダイ]ガ ソゲン ユ]タ_ナ ナ(F%)
『誰がそんなに言ったかー教えてください』 (木之下 1954:95)

木之下(1954)では、28 のような二つの下降調の区別が表記されていないと考え、28a の 2 モーラ化した下降が聞き取れる下降調に 27 表ではアスタリスクを付した。長音節の下降調はすべてこれに含まれる。また、短音節で 2 モーラ化するものは、すべて対応する長音節表記された RF% の形式をもっている。これら、つまり、ナ・ネ・ヲ・ヨ・ケーは、木部(1997) の分類での「高」の型の終助詞と分類することができる、と仮定すると、これらの助詞が、基本的な音節配列として nF をもつ B 型のアクセント句にさまざまな曲線声調が加わったものとよく似た声調体系をもつことがわかる。句音調と下降調句末イントネーションの付加された RF、句音調のみの R、句末イントネーションのみの LvF が揃い、欠けているのは全く無標の場合、ということになる。また、ハン・ワイの 2 モーラ下降調は、B 型の二人称代名詞ハン]、ワイ]に句音調が加わらず、下降調イントネーションのみが付加された場合と同形となる。

一方、必ず低く接続する木部(1997)の「低」の型に含まれるのは、質問の終助詞カ・ナ・ヤ・ネ⁷⁾・コ・ヨと念押しのだであり、ヨ以外は 1 モーラ下降調のほかに低い「昇調」形を持っている。この二つの声調がどのような関係にあるのかは現時点では判断する材料がないが、昇調のほうは、少なくとも音声的には下降・非下降(FLv/FR)の 2 モーラに分割できることから、1 モーラ下降 F をこれらの型の終助詞の基本的な音節配列とみて、出水方

言では終助詞のあるイントネーション句にのみに加わりうる上昇調あるいは非下降調の句末イントネーションの存在を認める、という分析も可能である。この分析では、終助詞も1音節アクセント句に準じた二型の区別があるが下降調のものは通常のA型の句音調を伴う形式を欠く、ということになる。

児玉(2008)では、主として撥音や促音の同化の領域という観点から、終助詞を句音調を伴わない特殊な音韻句として独立していると分析した。つまり、通常の音韻句内であれば促音や撥音の同化を引き起こすべき位置で、終助詞ネやドが高低に関わらず同化を起ささないことから、助詞との間に音韻句境界があると判断したのである。しかし、出水方言の助詞は、「高」の型が低く接続する場合でも、「低」の型であっても、これらの同化を引き起こしているとみられる。つまり、同化の条件が鹿児島方言と同じであるとすれば、これらが(同化した)先行アクセント句と音韻句を構成するA型・B型の単音節アクセント句とも分析できることになる。

- | | | |
|---------|------------------------|------------------------|
| (30) a. | [ソゲン [ユタ(∅)ン(RF)ナ(LvF) | 「(私が) そう言ったんです (ね)」 |
| b. | [ソゲン [ユタ(∅)ン(RF)]ナ(F) | 「(あなたが) そう言ったんですか？」 |
| c. | [ソゲン [ユタ(∅)イ(RF)]ヤ(F) | 「(おまえが) そう言ったのか？」 |
| d. | ユタ(∅)ッ(RF) | ユ]タ 「言う(A型) + ッ (準体助詞) |
| (31) a. | [コン]ナ(LvF) | 「来ませんね」 [konna] |
| b. | [コン]]ナ(F) | 「来ませんか？」 [konna] |
| c. | コン](Lv) | 「来ない(B型)」 [koN] |

一方、27表でアスタリスクを付したFR%*は、さらに音声的な分析が必要と思われる低い上昇調である。児玉(2008)では、鹿児島方言終助詞の低い非下降調には(F)LvとFRの二つの実現形があるが、母語話者としての判断に基づいてどちらを取るかは自由変異であろうと考えた。出水方言でこの分析が成り立つかどうかは、音声的な実証が必要であるが、音韻論上の観点から句末イントネーションを伴わないFLvが認められそうなものがある。一つは、多義的な終助詞ガで、これが「高」型あるいは「低」型の複数の助詞に分析できると考えた場合、RF%, R% (勧誘「~しよう」、推定「~だろう」)と共通の意味のみをもつ低い非下降調のガ(Lv)は、「句音調的高」付与形であるRF%/R%に対応した無標形ともみなせる。次のFR%と表記した32aと32dは、上昇を伴わないFLvの短い形でもほとんど意味は変わらない。この助詞の持っている語彙的な意味を考慮すると、イントネーションと

独立した無標形が存在すること（他の終助詞と異なること）はじゅうぶんに予想できることである。

- (32) a. [ハヨ] スー ガア(FR%) 「早くしよう」『普通の勧誘』
 b. (ハヨ)[スー [ガア (RF%) 「(早く)しよう」『強力な勧誘』
 c. [ソイ]デ [ヨカ] [ガ(R%) 「それでいいだろう」『きっぱりした断定』
 d. [ソイ]デ [ヨカ] ガ(FR%)⁸⁾ 「それでいいだろう」

(木之下 1954:94 改)

- cf. [ス()]ー ガ]ア(F%) 「するに決まっている」
 ソイ]デ ヨカ] ガ(F%) 「それでいいよ」

もう一つ、同様の無標形ではないかと推定されるのが、出水方言独特のノの下降調と対立する非下降形である。接続助詞テ（あるいはその促音化形）に接続して同様の機能をもつものとして、鹿児島方言では、たとえばメがあるが、補助動詞としての「見る」(B型)命令形「ミレ」の縮約形式であると考えられる中立的な非下降形に対し、F%形はさまざまな情動的なニュアンスを加えた形となり、本来のB型からは逸脱した全体が低い1モーラの下降調も使われる。出水方言のノも、語源は不詳であるが同様なB型アクセント句と分析できる。

- (33) a. ミ[テ]メ](Lv) 「見てご覧」
 b. ミ[テ]メ=F%(LvF) 「見てご覧よ」
 c. ミ[テ]メ=F%(F) 「見てご覧よ（だから言っただろう）」

出水方言のヤンは、このような対立に対応する敬語形のうち、通常はイントネーションが加わったものにのみ現れる縮約形と分析される。

- (34) a. ミテ]ミヤン] 「見て御覧なさい」
 b. ミテ]ヤン=F%(LvF) 「見て御覧なさい（よ）」

以上、2モーラ化を考慮して出水方言の終助詞を分析すると、児玉(2008)で採用したような、終助詞アクセント句を他のアクセント句と二分して、これに加わる曲線声調を区別し

て取り扱うような分析は正しいとはいえ、非下降(B型)／下降(A型)の助詞のもつアクセント型に上昇調あるいは下降調の句末イントネーションが被さって2モーラ化したものとしても分析できることを示した。歴史的には他の語彙から発達したと考えられるこれらの助詞が、(通常の)アクセント句としての性質を音韻的にも程度の差こそあれ維持している可能性がある、という観点が必要であろう。たとえば、「高」型の終助詞は、句音調を伴いうる、という点で「低」型より通常のアクセント句に近い性質をもつとも考えられる。⁹⁾

4. 韻律構造分析とモーラ声調単位

アクセント句を構成する音節が本来2モーラに分割されるかどうかを考慮して、鹿児島方言と出水方言の韻律構造を再検討する。下降調／非下降調の共存という意味での2モーラ音節は、A型アクセント句の句末に現れる、nFFの連続のみである。これをrFと表記することにする。非下降モーラrは、句音調に応じて上昇調Rまたは平調Lvで実現する。一方、音節全体が下降する下降調を、JFと表記する。鹿児島方言でも出水方言でも、アクセント句の声調配列は以下のようになる。鹿児島方言では、長閉音節と一部の長開音節のみがA型でrFとなるのに対し、出水方言では、すべての閉音節と長開音節がrFであり、JFは短開音節のみで可能である。

(35) A型 (nF+)JF あるいは (nF+)rF
 B型 nF+]

nF+は、1個以上の非下降調音節の連続である。このnF+およびr、つまり、非下降部分の全体の実現形を決めるのが、句音調である。句音調も離散的な体系をなしており、同じく離散的な句末イントネーションと組み合わせて(意味をもつ)イントネーションを表示すると考える。句音調の体系としては、無標形、典型的にはプロミネンス付与で無標形と区別される卓立形の、音調句の最初のアクセント句にのみ現れる二種と、いわゆる「しみじみ調」イントネーション句を構成するすべてのアクセント句に実現する抑制形の計三種が現時点では確認できる。

鹿児島方言では、以下のように表記する。

(36) 無標形 (nF+)[H 有標形 (nF+)#[H 抑制形 (nF+)![H

[は段階声調の上昇で、#[は上昇幅の卓立（つまり、左側の低めおよび右側の上昇）、!はその抑制を示す。位置はアクセント句の最終音節の前であるが、この位置が下降開始位置]である場合には1音節前にずれる。ずらす音節がない場合（1モーラ単音節）は、音節が2モーラ化される。Hは、rを含め音節冒頭に上昇調Rを加え、r以外に対しては音節後半部までにLvに近い高平調の曲線声調を実現する。#[Hと![Hではこの上昇調Rの開始位置も低められる。

これに対して1音節の卓立部を欠く出水方言の句音調を以下のように分析する。

(37) 無標形 [(nF+)H 有標形 [(nF+)#H 抑制形 [(nF+)!H

[は、音韻句頭でのピッチの回復を表示する。ピッチはこの後ゆるやかに上昇し、出水方言でも鹿児島方言と同様に高いピッチHが句音調の最後の音節に実現するが、卓立する場合にも単にこの最後部のピッチが上がるだけであって、鹿児島方言のような先行部の低めは現れない。木之下(1954)が次末モーラの傍線で表記したと考えられるこのような有標形の句音調の音声データでは、むしろ、先行する部分も付随して共にピッチが上がっており、1音節の卓立とはならない。このような全体のピッチが上がる場合と、後部のピッチがより上がって上昇幅が大きくなる場合とで異なる句音調を認めなければならない可能性もあるが、現時点ではその根拠はなく¹⁰⁾、単に卓立のための「低」が現れないという意味でHの側に#と!を付す表記を採用し、冒頭[のピッチはHの値に依存して非弁別的であるとみなす。

Hの実現する位置は、鹿児島方言と同様、]FをもつA型以外では末音節、]Fでは次末音節となる。ただし、鹿児島方言の[Hは短閉音節でも句末イントネーションの下降調と共存するが、出水方言では呼びかけイントネーションなどによる下降調が加わる場合には短音節が長音化しない限りB型でもHが1音節前にずれる。また、句末イントネーションと共存する場合を含め、2モーラ音節冒頭のRとして実現する場合の実現形は、特に先行音節がある場合や長閉音節の長母音部では上昇幅が小さく、全体として高平調に近い曲線となる。

句末イントネーションも同じく離散的体系をなすと考える。鹿児島方言にも出水方言にも見出されるのは、次の二つである。

(38) 下降調 F% 上昇調 R%

出水方言の下降調イントネーションは、呼びかけイントネーションに現れるような、短開音節の全体を下降調にする(J)F%とB型を2モーラ化する(r)F%を2種類もつが、前者は句音調あるいはその有標形と共起する場合の異形態とみなしうる可能性がある。句音調Hがない場合には出水方言でも短開音節の2モーラ化は可能だからである。一方、筆者の世代の鹿児島方言では頻繁に現れる上昇調句末イントネーションは、木之下(1954)の記述する出水方言では終助詞を伴うイントネーション句にしか出現せず、句音調を伴うことのないアクセント型JFの短開音節助詞を2モーラ化する。

出水方言の終助詞が担う曲線声調は、句音調を伴って単独で音韻句を構成しうるものがB型的nF、そうでないものがA型的Fというそれぞれ助詞固有のアクセントを仮定することにより、ほぼ、37の句末イントネーションとの組み合わせによる2モーラ化を含む体系として分析できる。筆者の内省による鹿児島方言の曲線声調は、必ずしもそのような分析ができない。この差が地域差であるのか世代差であるのか、いずれの体系が古いと考えるべきかは、この地域の終助詞イントネーションの比較研究を待つことになる。

出水方言と鹿児島方言との主たるの違いの1つが、長音節を2モーラと扱うかどうかである、という結論は、通説とあまり違わないように見える。アクセントの単位を曲線声調としたことも、結果から見ると段階声調による従来の分析と変わらないことから、その有効性に疑問がある。そこで、冒頭で述べた、「モーラの声調単位」について、あらためて日本語学でいう「モーラ」との違いを明確にしておく。

日本語学では、「モーラ」に関する議論は、日本語、中でも東京方言において「音節」をどのように定義するか、という議論と密接に関係してきた、という研究史上の経緯のために、「モーラ」が、音節ではないが音節に準ずる単位、いわば「モーラの音節」ともいうべきものとして取り扱われることが多い。実際、音節を「内部に音色の不連続点がなく、それ以上分割できないような、音の時間的な持続をもつ最小のまとまり」と定義し、無声音節（摩擦音を主音とするもの）や無音音節が可能であると考えれば、いわゆる「モーラ音素」はそのまま「音節」とも見なしうるのである。東京方言では、モーラの等時性が論じられることからわかるように、撥音や促音も長さをもつ単位であり、延長することもできるからである。アクセント論上の「モーラ」は、声調の不連続をもって音節をさらに小さな単位に分割するものであるが、この場合の単位も東京方言では「モーラの音節」に一致する。

ただし、日本語を離れば、閉音節末子音が頭子音と同様に単に音節間の音色の不連続

の種類を表示するのみでその長さ（それ自体の長さ）が音韻論的には意味をもたないような言語も普通に見られるし、日本語方言の中にも、鹿児島方言のように、撥音や促音が単独で延長されることがなく¹¹⁾「モーラの音節」が存在しない、いわゆるシラビーム方言は数多くある。実は、出水方言も鹿児島方言と同様にシラビーム方言というべきなのであるが、出水方言が木之下(1953)での撥音や促音への高低表記を根拠としてモーラアクセント方言とされるに至ったことは、出水方言に「モーラの音節」が存在するという誤解を招いている可能性がある。このため、本稿では「モーラの声調単位」という用語を使った。具体的にはこういうことである。出水方言でも東京方言でも下降調の閉音節は2モーラの声調単位から成るが、東京方言ではモーラの音素が各1モーラを構成するのに対し、出水方言では音節に2つの声調が共存しているというだけであって、その成分までは指定されない。たとえば、促音のような無声音に終わる閉音節でも、母音側で2つの声調が継起するために声調の弁別は維持される。また、東京方言で3「モーラ」に相当するような長母音をもつ閉音節でも、鹿児島方言と同じく2モーラにしか分割されず、この分割点が2:1の点であるか、1:2の点であるか、といったことによる対立はないのである。

では、出水方言で長音節がすべて2モーラである、という鹿児島方言との違いは、どう考えればいだろうか。ここでアクセント分析に段階声調ではなく曲線声調（ある時間内でのピッチの変化）を単位としていることが重要になる。アクセント句内の下降調がA型の1音節に限られている鹿児島方言では音節全体に亘って下降を続けられるような音節に長さの制限があるが、出水方言ではこの制限がさらにきびしいのである。出水方言で長音節がすべて2モーラであるのは、長音節全体に下降調が続くことができないためであるとすれば、2音節にわたる下降がありふれている東京方言とはずいぶん異なることになる。下降の時間が短いことは、同じ条件なら下降幅も小さくなるわけであるが、A型のこの下降がB型との型の弁別を担っていることを考え合わせると、出水方言は熊本県葦北方言とともに、鹿児島方言から熊本県内陸側の、下降調音節の分布がさらに限られている一型アクセントへの中間的な姿を示しているようにも見える。どちらからどちらへの変化であるのかは、二型アクセント全体に関わる問題である可能性がある。本稿の大きなテーマである下降調句末イントネーションが加わることによる型の弁別の中和も、アクセント句内の弁別的下降調が、音節の一部にしか影響しない句末イントネーションと同程度の長さしか持ち得ない、ということに理由を求めることができる。

一方、2モーラに分割できるための音節の長さの条件にも出水方言と鹿児島方言とで少し差がある。出水方言でも鹿児島方言でも、アクセント句構成に現れる2モーラ音節は長

音節に限られるが、下降調句末イントネーションが加わることによる2モーラ化は、短開音節でも起きる。音声的には短い音節が2モーラ化して2種類の声調を担うことも可能なわけである。ただし、出水方言では句音調が加わった場合には2モーラ化の条件として音節が長いことが加わる。鹿児島方言にはそのような制約はない。

この点で興味深いのは、Uwano(2007)をはじめとする詳細な記述データのある枕崎方言である。枕崎方言のデータは、あたかも鹿児島方言のHとLが逆転したような印象を与える声調配列となっている。おそらくA型・B型に共通な句音調を伴っていると考えられるこれらのデータの中で、特に興味深いのがA型末音節で、言い切りの場合の実現形で、音節の長短の区別なく、音節内部に上昇と下降の2つの曲線声調が共存しているようにみえる。言い切りでない場合には下降調がなくなり上昇・非下降の声調だけが現れるので、この言い切りの形は何らかの句末イントネーションが加わったことによる2モーラ化である可能性もあるが、鹿児島方言や出水方言との系統関係を考慮して、仮に、下降調の現れる言い切り形のほうが基底形であって2モーラが維持できない非終止位置で下降が遅れる、というような分析を試みる。

- (39) A 型 (nF+)rF. > (nF+)r].. ?
 B 型 nF+] ?
 句音調 ([H+)]nF[? ¹²⁾

Uwano(2007)の大島黒里方言のデータでは、A型・B型ともに、長音節が2モーラ化(RF/FR)しているとも解釈できそうな記述になっており、鹿児島方言と出水方言で想定した下降・非下降の対立だけでなく上昇・非上昇の曲線声調対立を考慮してモーラを分析する必要があるかもしれない。南九州における二型アクセントの通時的変化には、A型アクセント句の下降調部分の短縮が大きく関わっていると見られる。また、下降調声調の出現条件が問題になる九州の一型各アクセントでも、アクセント句の音節構成とともに下降の長さを考慮しなければならない。韻律論上2モーラの音節がどのように分布しているかは、音節構造と同一視できない重要な問題になるのではないかと考える。

注

- 1) 児玉(2008)注7では、このRFを句末イントネーションの1モーラ(RF%)とみなし、A型のR%とF%

の2モーラと区別されるとしたが、本稿ではRFを共に2モーラとみなし、A型とB型の違いはあるとしても離散的なものではないと考える。この注でA型の「モーラ分割」例として挙げたラブ[シ(R)]イン-F%「ラブシーン?」は、句音調のプロミネンス付与形と分析すべきであった。なお、上野(1992)では、この2モーラ音節を音節が分割されているものと分析する。確かにこれらの2モーラ音節はアクセント句末下降調で任意に2音節にも分割されうるが、たとえばシ\$イン「子音」が必ず2音節となるのに対し、これらの音節は1音節としての発音が無標であると考えられる。

- 2) 木之下(1953)にも例がある。
- 3) 木之下(1954:92)には、「病院や銀行など大勢の人々の中から呼び出す場合」の言い方として、ハヤシ[サー]ン、タケハ[ラ]サー[ン]のような二語構造的な語例が記されている。「生え抜きの音調でな」いためか、この用例は現在の出水方言では確かめられなかった。現在の鹿児島方言ならば、ハヤシ[サー]ン=R%、タケハ[ラ]サーン=FR%のような上昇調の呼びかけイントネーションが用いられるが、あるいは、1954年の段階ではまだ耳新しかったかもしれないこのような上昇調の呼びかけイントネーションを聞き違い（あるいは言い違い）たものかもしれない。
- 4) 14cの、音節再編を伴う末音節無声化は筆者の鹿児島方言での呼びかけ表現では出ないが、これは方言差というよりは世代差である可能性がある。筆者の鹿児島方言では、A型下降調の末音節に限り母音が無声化して無声音節となるが、呼びかけイントネーションが加わる時には無声化が妨げられる。タ[カ]シ>タ[カ]シ=F%「隆!」ヒロ[シ]>ヒロ[シ]=F%「弘!」。B型末音節の無声化は音節再編を必ず伴うが、勝負判定のカチ「勝ち!」のような特殊な文脈にのみ用いる。
- 5) 平山輝男氏の『全国アクセント辞典』では、ドレ、ドッチはともにA型とされているが、木之下氏は一貫してB型。疑問詞は鹿児島方言では単独での発音で通常は下降調の句末イントネーションを伴っているため、方言形ドイは、A型・B型のどちらにも解釈できる。A型・B型の両形が聞かれると思われるが、地域的分布や世代は不明。ただしダレ(ダイ)とナニ(ナイ)は、それぞれA型とB型で安定している。
- 6) 「コ」は筆者のデータ(出水市麓町 1930 生まれの話者)では確認できなかった。また、「ヨ」の木之下(1954)でのアクセント表記は、型の弁別を保ちながらアクセント句統合したものに下降調イントネーションが加わっているように見えるヨ[カイ]ヨ一、イ[タイ]ヨ一になっているが、ヨ[カイ]-ヨ「(どれ/何が) いいんだよ」、イ[タイ]-ヨ「(どこに) 行ったんだよ」であると解釈した。
- 7) 質問のネは木之下(1954)に言及がないが、p54からのナ・ネ・ヲ・ヨの項で質問に「使わない」と明記されているのはヲ・ヨのみである。なお、筆者の世代の九州方言では、これらの終助詞を落として句末イントネーションのみで質問を表示することがあるが、これは比較的新しい言い方であると思われる。

- 8) 木之下(1954)での下傍線表記は、A型句末の一部を含め、基本的には下降調のF%であるが、ガの下傍線の2例(もう一例は、ワイモ [イツ]ド ガ「お前も行くだろう?」)は、『昇調が普通』という記述からも低い非下降形であると考えられる。ガには話者の強い確信をもった判断(「痛い」のような話者自身しか知りえない内的事実にも接続)のニュアンスを表す低い下降調もあり、こちらにも言及されているが、表記上区別がない。低いドでも、二つの声調に言及しながら表記は下傍線のみである。一方、疑問のナでは、低い2モーラ化した非下降FR% (『子供に対するいたわりのこもった言い方』)を高いナアで表記して低い下降調と区別している。
- 9) なお、少なくとも筆者の内省では、28a-bのような低い位置での2モーラ化した下降調と単一の下降調の対立は認められないが、3c-dと同様に聞き分けは十分に可能であり、鹿児島方言においてもこれが世代差である可能性がある。出水方言のこのようなLvFタイプの終助詞に対応する助詞は、筆者の内省ではF%に相当する場合(ワイ、ケー、ヨ)とRF%に相当する場合(ネ、ナ)に分かれる。
- 10) 出水方言の句音調体系では、句音調の加わる部分の長さに応じて上昇曲線が変わり、短いほど上昇曲線も急になる。上昇曲線による弁別を維持するためには京阪方言のような高起高平調と低起上昇調のような体系が必要になろうが、この場合は末尾の音節だけが卓立することもありそうである。
- 11) 強制的発音で撥音や促音が延長される場合も常に先行部の延長を伴い、閉音節全体が伸ばされていると考えねばならない。パツ|カイ「ばかり」、スツ|タイ「すっかり(疲れた)」、ズン|バイ「たくさん」など。東京方言のように、母音か子音かのいずれかを伸ばす、というような選択はできない。なお、鹿児島方言でも語頭の撥音は音節を成している。「ンダ」(まあくンド+ワ「みどもは)」、「ンニャ」(いいえ<「否)、「ンマカ」(うまい)など。
- 12) 句音調は、国立国語研究所の「全国方言談話データベース」に収録された枕崎市に隣接する旧揖宿郡願娃町の方言で聞かれる頭音節の高い音調を参考にした。この方言でも、長音節の2モーラ下降が聞かれる。39の分析案で特に問題になるのは、アクセント句末でB型に仮定した」と句音調に仮定した[が両立しない点である。検証には連文節データによる分析である。

参考文献

- 上野善道(1992)「鹿児島県吹上町方言の複合名詞のアクセント」『日本語イントネーションの実態と分析』重点領域研究「日本語音声」C3 班平成3年度研究成果報告書:91-208
- 上野善道(2003)「書評:木部暢子著『西南部九州二型アクセントの研究』」『国語学』212: 74-84.
- Uwano, Zendo(2007) "Two-pattern accent systems in three Japanese dialects", In Riad, Tomas and Carlos Gussenhoven (eds.) *Tones and tunes. Volume 1: Typological studies in word*

and sentence prosody. Berlin/New York: Mouton de Gruyter. 147-165.

木部暢子(1997)「鹿児島市のイントネーション」『諸方言のアクセントとイントネーション』三省堂. 249-268.

木部暢子(2000)『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版.

木之下正雄(1953)「鹿児島県出水方言におけるアクセント節について」『国語学』15:70-80.

木之下正雄(1954)「出水方言における呼びかけのイントネーションについて」『鹿児島大学教育学部教育研究所研究紀要』6:92-98.(<http://hdl.handle.net/10232/6628>)

児玉望(2005)「鹿児島タイプ二型アクセントの音調句」『熊本大学言語学論集4』281-307.

児玉望(2007)「音調句と日本語韻律構造」『熊本大学言語学論集6』1-22.

児玉望(2008)「曲線音調と日本語韻律構造」『熊本大学言語学論集7』1-40.

柴田武(1955)「日本語のアクセント体系」『国語学』21:44-70.

早田輝洋(1992)「東京方言におけるアクセントの担い手と複合の熟合度」『日本語イントネーションの実態と分析』重点領域研究「日本語音声」C3 班平成3年度研究成果報告書: 259-264 [早田(1999: 197-207)]

早田輝洋(1993)「アクセントについての若干の覚書き」初出『九大言語学研究室報告』14. [早田(1999: 335-341)]

早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』東京: 大修館書店.

平山輝男(1936)「南九州アクセントの研究(一)」初出『方言』6-4 [井上史雄他(1999)編『九州方言考』ゆまに書房. 1.77-98.]

平山輝男(1937)「熊南アクセントと熊・鹿アクセント境界線」初出『コトバ』7-3、[井上史雄他(1999)編『九州方言考』ゆまに書房. 1. 113-131.]